

平安和歌における節氣と曆月意識についての考察

— 初期定数歌の構成を軸に —

渦 卷 恵

一 歌題に見る節氣と曆月

日本では古来から、月の運行に拠る太陰曆と、日照を基準とする太陽曆を組み合わせた「太陰太陽曆」を用いて「月日」を定めてきた。唐の曆法に基づく「元嘉曆」「儀鳳曆」「大衍曆」「五紀曆」「宣明曆」は、都度切り替えられながら採用され、「具注曆」は、貴族官人の曆として、一種權威のシンボルでもあった。

和歌には時の推移、四季の変化が詠まれ、第一勅撰和歌集である『古今集』が、集の最初に四季の部立を作り、曆の立春から歳暮まで、おおむね月日の経過を辿る構成になっていることについては、すでに詳細に検証されている¹。また、

尚侍の右大将藤原朝臣の四十賀しける時に、四季の絵描けるうしろの屏風に書きたりける歌

春日野に若菜摘みつつよろづ世を祝ふ心は神ぞ知るらむ（古今・賀、三五七 素性法師）などがあるように、大和絵の画題の進展によつて、四季を描く屏風絵が作成され、年を重ねることを寿ぐ歌が添えられたことがわかる。さらには、曆を意識した月次屏風も作られるようになる。

『新編国歌大観』（古典ライブラリー）によると、月次屏風の初出は、『壬生忠岑集』の、

延喜の御時の月次の御屏風に、夏はつるに

夏はつる扇と秋の白露といづれかまづは置きまさらむ（忠岑集、一七二）
で、季節の移り変わりを詠むもの。

『紀貫之集』三番から二二番歌までにある月次屏風の題は、次の通りである。

子の日遊ぶ家

二月、初午稲荷詣でしたる所 弓のけち

三月、田返す所 忘れ草 三月つごもり

五月、ともし

六月、鵜飼 水無月の祓へ

七月七日 たなばた

八月、駒むかへ 小鷹狩り 志賀の山越え 衣うつ

十一月、神楽 大鷹狩り 臨時のまつり

十二月、仏名

『大中臣能宣集』八二番から九二番までの月次屏風には、

正月、須磨の浦もしほやく所

二月子日、をとこをむな松引き、若菜つむ所

三月尽をしむ所

四月、山里に卯花咲ける所

五月五日、女どもはしにゐて時鳥をきく

六月、川づらに祓へする所、網引き、鶺鴒など飼ふ

七月七日 たなばたまつりする所

八月、駒迎

九月、山里の家ゐに女ども集まりゐたる、稻など干せり、小鷹狩りの人々消息など言ひいるるに

十月、あじろに紅葉流れより、旅人あまた立ちとまりてみる所

十一月、神まつる家

十二月、雪ふる山の(ママ)

という題が見られる。月次屏風が、正月からはじまり、暦に従って月を追いつつ、時候のものや行事を詠む構成であることがわかる。

さて、平安時代中期に成立した類題集『古今和歌六帖』⁽⁶⁾の題は、後世、六帖題として重んじられるが、歳時部は次のように分類されている。

第一帖 歳時部

春

夏
 春立つりたてつ日
 子の日
 若菜
 弥生
 三日
 春のはて
 ついたちの日
 あをむま
 なかの春
 残りの雪

はじめの夏
 衣がへ
 さつき
 卯月
 卵の花
 神まつり
 五日
 あやめ草
 水無月
 夏越の袂へ
 夏のはて

秋
 秋立あきたてつ日
 はつ秋
 たなばた
 あした

葉月
 十五夜
 駒ひき
 長月

冬
 初冬
 神無月
 霜月
 神楽
 師走
 仏名
 うるふ月
 年のくれ

傍線を付したように、月名を冠した「睦月」「弥生」などの題が見え、和歌題が暦月意識に基づいて四季に配されていることがわかる。一方で、波傍を付したように、「立春」をはじめとする、いわゆる二十四節気を背景とする分類意識も見出せる。以下、暦月は傍線、節気は波線を付す。

二十四節気とは、

春 立春 雨水 啓蟄 春分 清明 穀雨
 夏 立夏 小滿 芒種 夏至 小暑 大暑
 秋 立秋 処暑 白露 秋分 寒露 霜降
 冬 立冬 小雪 大雪 冬至 小寒 大寒

のように、冬至、夏至、春分、秋分など、日照時間を基準に四季をそれぞれ六等分するもの。月の順行による太陰曆は、実際の季節とずれを生む。一方、二十四節気は田植えなどの時期を知る目安になる。

六帖題によると、春立つ日が睦月より先に、初冬が神無月より先に置かれ、曆月意識より節気が優先することに気が付く。各季節の最後に、季のはての題が置かれるのも、冒頭の「立春」など季の初めと呼応するためであると考えられる。

橋本不美男『王朝和歌史の研究』³⁾にも、「王朝貴族の詠歌の発想には、年初の元日より立春の方が、より強くより先行する創作意識があったらしい。このことは王朝貴族の生活感覚ともからみ、重要な問題であろう……。」と指摘されている。

さて、天長三(九二五)年成立の漢詩文の部類集、大江維時『千載佳句』⁴⁾は、冒頭を「四時部」として、

立春 早春 春興 春暁 春夜 暮春 送春
 首夏 夏興 夏夜 苦熱 避暑 納涼 晚夏
 立秋 早秋 秋興 秋夜 秋暮
 立冬 冬興 冬至 冬夜 歲暮

とし、「元日、寒食、三月三日、七夕、八月十五夜、重陽」を後続する「時節部」に別にまとめて配す。

また、六帖の成立に近い長和元（一〇一二）年、藤原公任により編纂されたとされる『和漢朗詠集』では次のように題が配置される。

春

立春 早春 春興 春夜 子日付若菜 三月三日 暮春 三月尽

閏三月 鶯 霞 雨 梅付紅梅 柳 花付落花 躑躅 藤 款冬

夏

更衣 首夏 夏夜 端午 納涼 晚夏 花橘 蓮 時鳥 蚩 蟬

秋

立秋 早秋 七夕 秋興 秋晚 秋夜 八月十五夜付月 九日付菊

九月尽 女郎花 萩 蘭 槿 前栽 紅葉付落葉 雁付帰雁 虫

鹿 露 霧 擣衣

冬

初冬 冬夜 歳暮 炉火 霜 氷付春氷 雪 霰 仏名

ここでは、春部「暮春」のあとに「三月尽」「閏三月」が、秋部では「秋晚」のあとに「九月尽」が置かれ、逆転して節気より暦月のほうが重んじられているようである。では、平安時代において、節気と暦月はどのように意識されていたのであろうか。

二 『古今集』の節氣意識

まず、『古今集』における節氣意識を辿ることとする。『古今集』は、『万葉集』の春雜歌・春相聞といった分類をシンプルにし、春夏秋冬の四季の自然と、恋を中心とする人事を大きな二本柱として構成され、部立内の歌の配列も時の流れを意識した並びとなっている。集の冒頭には、次のように二十四節氣の「立春」を詠む歌が置かれる。

ふる年に春立ちける日詠める

年の内に春は来にけりひととせを去年とやいはむ今年とやいはむ（古今・春上、一 在原元方）

詞書から明らかなように、曆の十二月のうち立春を迎えた「年内立春」詠で、曆と節氣のずれを詠む歌である。この歌が十二月の詠でありながら春部の冒頭に置かれたのであるから、十二月という曆月より、立春という節氣意識を重んじて配列されたものと言えよう。霞や春風、解氷といった春の兆しそのものを詠む歌でなく、人知の定める曆そのものに焦点を当てた歌が冒頭に置かれる意味は大きい。

川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究・上』⁵⁾は、「古今集が単にいわゆる名歌の詞華選であったとだけいうよりも、当時の漢詩の詞華選がそうであったように、四季の推移の整然たるヴァリエーション、恋愛感情の高まりの整然たるヴァリエーションに応じて排列し、専門でない人々が歌を作ろうとする時、直ちに検出し参考にしうるように配慮せられたためにほかならないと思う。」と、古今巻頭歌の意義を指摘する。

小島憲之・新井栄蔵『新日本古典文学大系』⁶⁾には、「年内の立春は、冬至の曆で平均して二年に一度くらいあつて珍しくないが、年内の立春が来年の元旦に先立つそのずれへの驚きと、春が来た喜びとを素直によみあげ、下句で、

驚きの内容を分析し、結句「今年とやいはん」に重点を置く。曆（天の紀、人の紀）を、巻頭歌で問題にした点に、
 勅撰的な趣もあるう。」とあり、小沢正夫・松田成穂『新編日本古典文学全集』にも、「このように季節の風物が全
 くうたわれていない歌は当時としても珍しい。しかし、巻頭の序曲ともいべき歌としては、このほうがむしろ好ま
 しい。季節の推移に伴う自然の返歌を具体的に表現することは、後統の歌に譲るといのである。」とある。

「年内立春」は、すでに『万葉集』にも詠まれている。次の家持歌は、詞書によると十二月二十三日の詠である。

廿三日於二治部少輔大原今城真人之宅一宴歌一首

月よめばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか（万葉・巻二十、四四九二 家持）

暦月の上ではまだ十二月で冬だったのに、すでに霞が立っているのは、立春だからだろうか、と詠む。眼前の霞か
 ら、立春を意識する歌で、曆と節気のずれそのものを詠む古今歌とは趣を異にする。むしろ、菅原道真『菅家文章』
 の、

偏に曆の注すに因りて春の来ることを覚る

物の色と人の心と尚冷じき灰のごとくなるものを（菅家文章、四 立春在十二月二十六日）

と同じ発想に基づく、漢詩文的な発想と言えよう。

『古今集』の編者が、十二月の歌を春の歌として冒頭に持ってくるのは、眼前の風景で春を実感する万葉歌とは一
 線を隔する意識からであり、理を重んじる集の性格を象徴する歌だったからであろう。

田中新一『平安朝文学に見る二元的四季観』は、古今冒頭歌と万葉歌の「年内立春」歌を比較し、古今歌について、

「立春」即「迎春」、「立春の日」こそは「春に入る日」であることを明確に宣言している。……そこにはとまどい

のない節月的四季区分観（傍線はママ）が顔を見せている。……ということは「立春が来ようが十二月のうちは冬」と

いう従来の見方に対する挑戦である。家持グループより以前の段階では疑いすら持たれなかつた常識としての曆月的四季観に対し打ち立てた新思想である。「十二月だから冬」に対して「十二月でも(立春なら)春」を主張したのである。」と論じる。

では、立春以降の「雨水・啓蟄・春分・清明・穀雨」などの他の節氣は、どのように詠まれているのだろうか。二首目は、

春立ちける日詠める

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つ今日の風やとくらむ(古今・春上、二一貫之)

で、「立春解凍」を詠むが、以後「雪」の歌が七首続き、「雨水」、すなわち雪が雨に変わる景色を詠む歌は見出せない。春上の部立に「雨」を詠むのは、

梓弓おして春雨今日降りぬ明日さへ降らば若菜摘みてむ(古今・春上、二〇 詠み人知らず)

わがせこが衣はる雨降るごとに野辺の緑ぞ色まさりける(古今・春上、二五 貫之)
のみ。以下、春部において、二十四節氣を明確に意識したと思われる歌は認められない。

春部の最後には次の三首が置かれる。

弥生のつごもりの日、花つみより帰りける女どもを見て詠める

とどむべきものはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か(古今・春下、一三三二 躬恒)

弥生のつごもりの日、雨の降りけるに藤の花を折りて人につかはしける

ぬれつつぞしひて折りつる年の内に春はいく日もあらじと思へば(古今・春下、一三三三 業平)

亭子院の歌合の春のはての歌

今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花のかげかは(古今・春下、一三四 躬恒)

傍線を付したように「弥生のつごもり」の二首のあとに波線「春のはての歌」が置かれ、暦の月日より節気が重視された配列になっている。

最後の躬恒歌は、延喜十三年の亭子院の歌合のもので、古今撰進の年より後に加えられた歌になる。

その一首前の業平歌について、松田武夫『新釈古今和歌集』¹⁰⁾は、この「年の内に春は」という表現が、春部冒頭歌の「年の内に春は」と対応するとし、「おそらく、撰者が、語句の一部に共通点のある歌を、春歌の巻頭と巻尾に載せ、はるかに首尾の呼応を計ったものと想像させる。その意味において、この歌は、延喜五年、奏覧時の春歌下の最終歌とも見られる。」と指摘する。

また、金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集』¹¹⁾には、

三月三十日慈恩寺二題ス 惆悵ス春帰リテ留メ得ズ 紫藤花下漸ク黄昏ナリ(白氏文集・卷十三)

の影響が指摘されている。

ただし、晦の日の歌でありながら「春はあと何日もない」と詠む点が不審である。

筋切本、元永本、業平集の下の句は「春は今日をし限りと思へば」とあり、それならば、詞書と合致する。『古今和歌集打聴』は、

やよひの晦日と迫れるをば、年の内に春は幾日もなど緩びて云ひたるぞ限りなく上手の仕業なりける

と尽日をぼかして余裕を持たせた表現であると解し、また詞書の「晦の日」が尽日をいうのではなく、月末の数日のうちの一日だとする解釈もある。¹²⁾

この歌について、前出『平安朝文学に見る三元的四季観』は、「今日は晦の日だが、翌日の四月に入っても立夏に

ならないからまだ数日は春だ、ということ詠んだ。よつて、躬恒の、春の果てを詠んだ歌があとから加えられた。」とし、冒頭歌の年内立春と同様に「撰者らの二元的四季観のなせる可能性を窺わせる」と論じる。

ところが、実は、一年の内に春の日はあつという間に過ぎ去るので、幾日もないように思われるという表現は『白氏文集』に見出せる。

歳時春日少 世界苦人多 (白氏文集・卷十六)

この詩句は大江千里の『句題和歌』に「歳時春尚少」(千里集、一三三詞書)と引かれている。また、集の、

いたづらにすぐす月日は思ほえて花見てくらす春ぞ少なき (古今・賀、三五一 藤原興風)

において用いられていることは、すでに指摘されている。¹³⁾ この詩句を介在させると、節氣と曆のずれとせずとも解釈できるのではないか。「年の内に春はいく日もあらじと思へば」を、もともと一年の中でもつとも待ち望まれる春がやつて来て、また去つていくので、春の季節があつという間に過ぎ去り、春の日々は他の季節より少ないように感じられるということを詠んだと解せば、田中氏の「二元的四季観」に基づく表現とせずとも、理解できよう。

管見では「ぬれつつぞ」歌について、こうした指摘はないが、詞書の「つごもりの日」を月末の数日としたり、二元的四季観をもつて解さずとも理解することが可能かと思われるのである。

では、集のほかの部立てにおいて、節氣はどのように意識されているのであろうか。

夏部冒頭歌は、「題知らず」の、

わが宿の池の藤波咲きにけり山時鳥いつか来鳴かむ (古今・夏、一三五 詠み人知らず)

で、立夏そのものを詠むものではない。以下、次のように連続して曆月を含み詠む歌が並ぶ。

卯月に咲ける桜を見て詠める

あはれてふ事をあまたにやらじとや春におくれてひとりさくらむ (古今・夏、一三六 紀利貞)

五月まつ山時鳥うちはぶき今も鳴かなむこそこのふる声 (古今・夏、一三七 詠み人知らず)

五月来ば鳴きもふりなむ時鳥まだしきほどの声をきかばや (古今・夏、一三八 伊勢)

五月まつ花橘のかをかげば昔の人の袖のかぞする (古今・夏、一三九 詠み人知らず)

いつのまに五月来ぬらむあしひきの山時鳥今ぞ鳴くなる (古今・夏、一四〇 詠み人知らず)

夏部最後の歌は、躬恒の、

水無月のつごもりの日よめる

夏と秋と行きかふそらのかよひちはかたへすずしき風やふくらむ (古今・夏、一六八 躬恒)

で、暦の上での夏の終り、六月晦日で閉じられる。

秋部冒頭には、

秋立つ日詠める

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる (古今・秋上、一六九 藤原敏行)

と、立秋の歌が配される。風によって秋の訪れを知るといふ歌であり、節氣の七十二候「涼風至る」を踏まえたとも

解せるが、巻末部を見ると、

秋のはつる心をたつた河に思ひやりて詠める

年ごとにもみぢ葉流す竜田河みなどや秋のとまりなるらむ (古今・秋下、三二一 貫之)

長月のつごもりの日、大井にて詠める

ゆふづく夜をぐらの山に鳴く鹿の声の内にや秋は暮るらむ (古今・秋下、三二二 貫之)

同じつごもりの日詠める

道知らばたづねもゆかむもみち葉を幣とたむけて秋は去にけり（古今・秋下、三三三 躬恒）
と、「秋のはつる心」という詞書が先、晦の日を詠む二首が卷末にある。

秋部最後の躬恒歌は「秋は去にけり」と、すでに秋が去ってしまったと詠む点が不審である。前出『平安朝文学に見る二元的四季観』は、本来は冬部に入るところ、立冬が九月中だったので秋部に配置されたとし、「春部・秋部の卷末に共通する、撰者の心に揺れる二元観を見ることができると指摘している。」と指摘している。

しかし、十二月立春詠が立春と言う節氣を重視して春に配置されたなら、この歌も立冬であることを重んじて冬部に入れるべきであろう。ところが、冬部の冒頭は、

題しらず

竜田河錦おりかく神無月しぐれの雨をたてぬきにして（古今・冬、三二四 詠み人知らず）

と、「立冬」でなく、紅葉とともに「神無月」という月の名前が詠まれ、十月と言う曆月を冬の始まりとしているのである。

冬部の最後は、

物へまかりける人をまちて師走のつごもりに詠める

わがまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず（古今・冬、三三八 躬恒）

年のはてによめる

あらたまの年のをはりになるごとに雪もわが身もふりまさりつつ（古今・冬、三三九 在原元方）

寛平御時きさいの宮の歌合の歌

雪ふりて年の暮れぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ (古今・冬、三四〇 詠み人知らず)

年のはてによめる

昨日といひ今日とくらしあすかがは流れてはやく月日なりけり (古今・冬、三四一 春道列樹)

歌たてまつれとおほせられし時に詠みてたてまつれる

ゆく年のをしくもあるかなますかがみ見るかげさへにくれぬと思へば (古今・冬、三四二 貫之)

のように、師走晦日の歌のあとに、歳暮の歌が連ねられており、春部冒頭歌同様、節氣が意識されている。

大洋和俊『古今集の時間―四季の部をめぐって―』¹⁴⁾は、先に挙げた躬恒歌

道知らばたづねもゆかむもみぢ葉を幣とたむけて秋は去にけり

が、秋部に置かれることについて、「詞書が或る規制力を持つ以上、編者が秋の部の最後に据えたのは妥当であるが、和歌の時間では既に過去と看なされているのである。…秋でありながら秋より先の未来の時間がいりこんでいるのだ。詞書に規制されながら、和歌固有の二重の時間性をそこに認め得る。」と論じ、春部に残雪や氷を詠んだり、夏末尾歌に、

みな月のつごもりの日詠める

夏と秋と行きかふそらのかよひぢはかたへすずしき風や吹くらむ (古今・夏、一六八 躬恒)

が置かれるように、部立てにとらわれず、自然の推移に随順する、いわば二重の時間を孕み持つ集であると指摘する。すなわち、集の冒頭における暦月でなく節氣を重んじるという意識は、集全体に及ぶものではないように思われる。

三 『後撰集』以降の春部における節氣

『後撰集』の春部冒頭は、

正月一日、二条の後の宮にて白きおほうちきを賜はりて

ふる雪のみのしろ衣うちきつつ春來にけりとおどろかれぬる (後撰・春上、一 藤原敏行)

春立つ日詠める

春立つとききつるからにかすが山消えあへぬ雪の花とみゆらむ (後撰・春上、二 凡河内躬恒)

と、『古今集』と異なり、詞書では曆月の正月一日が先に、立春がそのあとに配される。

ところが、

ある人のもとににひまゐりの女の侍りけるが、月日ひさしくへて、む月のついたちごろにまへゆるされたりけるに、雨の降るを見て

白雲のうへしる今日ぞ春雨のふるにかひある身とはしりぬる (後撰・春上、四 詠み人知らず)

女の宮つかへにまかりいでて侍りけるに、めづらしきほどはこれかれ物いひなどし侍りけるを、ほどもなく

ひとりにあひ侍りにければ、む月のついたちばかりにいひつかはしける

いつのまに霞立つらんかすがのの雪だにとけぬ冬とみしまに (後撰・春上、一五 詠み人知らず)

のように、春部に隔てて「睦月一日」ごろの詠が見出されるため、節氣と曆月意識が配列上の基準にないことがわかる。

『拾遺集』は、次のように、立春を霞によって知る歌からはじまる。

平さだふんが家歌合によみ侍りける

春立つといふばかりにやみ吉野の山もかすみてけさは見ゆらん(拾遺・春、一 壬生忠岑)

承平四年中宮の賀し侍りける時の屏風のうた

春霞立てるを見れば荒玉の年は山よりこゆるなりけり(拾遺・春、二 紀文幹)

『後拾遺集』は、『後撰集』同様に暦月の正月一日からはじまり、立春詠が後続する。

正月一日詠みはべりける

いかに寝て起くるあしたにいふことぞ昨日を去年と今日を今年と(後拾遺・春上、一 小大君)

みちのくにに侍りけるととき春立つ日詠み侍りける

いでて見よ今は霞も立ちぬらん春はこれよりすぐとこそ聞け(後拾遺・春上、二 光朝法師母)

冒頭歌は、『古今集』の冒頭歌を踏まえているが、「年内立春」詠ではなく、正月一日を年の初めとする詞書が付される点で、古今歌と異なる構成意識が見られる。

『金葉集』初度本春部冒頭は「歳中立春の心を詠める」として貫之の年内立春歌が採られるが、二度本、三奏本にはこの歌は採られていない。

注目されるのは、二度本の夏部末尾部である。

六月廿日ころに秋の節になりける日、人のがりつかはしける

水無月の照る日のかげはさしなから風のみ秋のけしきなるかな(金葉二・夏、一五三 摂政左大臣)

公実卿の家にて対水待月といへる事を詠める

夏の夜の月まつほどの手ずさみにいはもる清水いくむすびしつ（金葉二・夏、一五四 基俊）

秋隔一夜といへることを

みそぎするみぎはに風の涼しきは一夜をこめて秋や来ぬらん（金葉二・夏、一五五 顕隆）

一五三番は六月に秋の節、すなわち立秋を迎えたと詠むが、秋部でなく、夏部に置かれており、夏部最後は六月尽日の「水無月祓」を詠む歌が配され、節氣より曆月が重んじられる配列になっているのである。以上、見てきたところ、四季の区切りは、節氣でなく曆月で区切る意識が強いことがわかる。

そこで、勅撰集以外で部立意識の窺える集における「年内立春」の配置に注目すると、次の歌が見出される。

年の内に花咲きにけりうちしのび春吹く風にまだきちらすな（好忠集、五二三 源順百首冬十末尾歌）

年の内に春は来ぬれどいつしかときかまほしきは鶯の声（高遠集、三七二 月次歌の連作中の十二月）

十二月、春のせちぶしたる年、梅の花を見て

降る雪も下にはほへる梅の花しのびにげて春は来にけり（麗花集・冬、七九 中務）

最初の歌は、『好忠集』所載の「順百首」の冬部末尾歌である。「順百首」は、曾祢好忠を創始とする初期百首のひとつで、天徳末（九六一）年頃に成立した「好忠百首」に応和する体で詠み出されたもの。四季や恋などの部立てを設け、一気に詠まれた百首である。

歌は、旧年の内に花が咲き春風が吹き始めたと詠む。明らかに古今冒頭歌を踏まえた読みぶりであるものの、冬部の末尾に置く点に工夫が見られる。

また、『大式高遠集』の屏風歌が、「年内立春」を冬部に配することも注意されよう。『大式高遠集』が、初期百首の影響を強く受けたものであることも、すでに論じられている。

驚頭裕子「大式高遠の歌風について」¹⁶⁾は、集の月次歌が好忠の百首歌や三百六十首歌の影響を強く受けて成立したものであることを指摘する。さらに松本真奈美『大式高遠集』「月次歌」について¹⁷⁾において、高遠の月次歌が、好忠や他の初期百首の表現に学んでいることから、初期定数歌に連なるものとして新たに位置付け、好忠との直接的な交渉を辿り、成立について、「高遠二十九歳秋の好忠との邂逅にほど近い青年期の作が、家集巻末近くに増補された可能性も皆無ではないのではないか。更に訴嘆性が希薄であることを考え合わせれば、好忠の営為に触発され、ともかくも自ら定数歌を詠みたいという意識に支えられた、若年期の一種の習作ではなかったかと思われる……」と論じる。高遠二十九歳は、寛和二(八七八)年。月次歌は「好忠百首」や「順百首」の成立から程なく詠まれたということになる。

『麗花集』は、一条天皇が帝位についている頃、『後拾遺集』成立以前に編まれた歌集である。この歌は『中務集』一六番に「三条のおほいまうちぎみ権中納言とつかうまつれる屏風の絵に」とある四季の屏風絵の冬の絵柄につけた歌である。

さて、『新編古典文学全集』の古今冒頭歌注には、「平安末期には「旧年立春」「歳内春」などの歌題も行われたが、『永久四年百首和歌』ではこれを冬の部の歌題とする。」とあり、神尾暢子『歳内立春と古今巻頭―王朝の暦法と元方の方法―』にも指摘がある。¹⁷⁾

「永久百首」は、長治二(一一〇五)年五月から同三年の間に堀河天皇に奏覧された「堀河百首」に追隨する百首で、永久四(一一一六)年十二月二日、堀河天皇、中宮篤子の追善のために披講されたもの。

「堀河百首」では、春部「立春」題に、

よし野山つもれる雪の消えゆくはまだふる年に春や立つらむ(堀河百首、四 師頼)

が詠まれる。

「永久百首」は「年内立春」を冬部末尾に置き、次のように春を迎えた喜びでなく、年を重ねることへの嘆きなども詠まれる。

年すぐる山べなこめそ朝がすみさこそは春とともにたつとも（永久百首、四一四 顕仲）

一とせに春は二たび立ちぬれど老木の花はいかがさくべき（永久百首、四一六 仲実）

やや後の『散木奇歌集』でも、「年内立春」は冬部に配されている。

歳中立春

数そふとなげくも知らぬ年の内にいそぎたちぬる春がすみかな（散木奇歌集・冬、六七九）

同じ心を詠める

淡雪もまだふる年にたなびけばころまどはせる霞とぞ見る（散木奇歌集・冬、六八〇）

また、『基俊集』でも、「年内立春」が冬の歌の中に混じって詠まれている。

池氷作鏡

わが宿の池の水をかみとて見ればあはれに老いにけるかな（基俊集・上、五五）

旧年立春

老いゆけど惜しけくもなし年の内に春にふたたびあひぬと思へば（基俊集・上、五六）

梅告春近

立ちよらばかげふむばかり春来ぬと梅の匂ひのほのめかすかな（基俊集・上、五七）

随源遠「平安朝における年内立春詠の展開」²⁰⁾は、『金葉集』初度本では「年内立春」が春部冒頭に置かれるのに対

し、撰者、源俊頼の『散木奇歌集』では、冬部に見られることについて、「節氣を優先した『古今集』巻頭の配列は、文学史の視点から見ると、重要な意味を持つ一方、歌の世界において、圧倒的に優位を占める暦月が節氣に優先順位を譲ったことに、違和感を覚えた歌人も存在すると推測される。……そういった流れの中で、年内立春を再考する発想が生まれたのではないか。……『永久百首』や『散木奇歌集』に見られる、年内立春詠を冬の部に配置する試みは、一般的な暦月優先意識への復帰という一面をも有していると考えられる。」と論じる。

しかしながら、「永久百首」や『散木奇歌集』は、初期百首の強い影響のもとに成立したもので、「年内立春」を冬の部に配置するのは、俊頼らの節氣優先に対する反発ではなく、「順百首」の配置に想を得たためであると考えべきではないだろうか。

『新編日本古典文学全集』注に、「永久百首」が早い例であるとするが、「順百首」をもってその嚆矢とすべきであるうし、「永久百首」が、表現のみならず、題や構成も初期定数歌に倣ったことは大いに注目されよう。

四 初期定数歌における節氣と暦月

そもそも百首歌は、「惠慶百首」に付された序文に、

ももちのうたの題、これは世中に曾祢好忠といふ人の詠める歌の返し

わがすべらぎや、天徳の末のころほひ、あざなそたむ」といふ人、ももちどりももちの歌をさぐり出だし……

とあることから、曾祢好忠を創始とし、題に添って百首を一回的に詠み出す形式であったことがわかる。「好忠百首」は天徳末(九六一)年頃に成立。長文の序に続き、春・夏・秋・冬・恋・查冠歌・物名歌の計一〇二首からなる。物

名歌は「きのえ」以下の十干、「一日めぐり」「一夜めぐり」などの神名、「ひんがし」以下の八方位を詠む。序文に三十余歳にして官途の望みを絶たれた不遇を訴え嘆くために詠み出したとあり、同じ境遇の歌人の共感を集め、順・惠慶は同じ部立てに基づく百首歌を詠作して追隨した。さらに好忠は、百首を詠んだ十年後に「春のはじめ 正月 中 正月をはり 中のはる、二月のはじめ 二月中 二月のをはり……」と曆の月日を辿る『三百六十首歌』を詠む。他にも、「源重之百首」、藤原師氏の『海人手古良集』、『別田千穎集』他、『賀茂保憲女集』、『重之女百首』や、『和泉式部百首』、『相模百首』など、『好忠百首』に倣う定数歌が現存する。

「和泉式部百首」は、

思ふことみなつきねとてあさの葉をきりにきりてもはらひつるかな (和泉式部集・夏末尾、三九)

もみぢ葉のこの元にあるを(マ)見てかみな月とはいふにざりける (和泉式部集・冬冒頭、六〇)

と、曆の月の名前を詠みこむ歌を季節の末尾と冒頭に置く、曆月意識を優先した構成になっている。

式部百首より後に詠まれた相模の百首とその返しの百首では、「はつ春五首 中春 はての春……」とあるが、再度詠んだ百首には「正月 二月 三月……」とあり、立春や春分というような節氣でなく曆月意識に基づいて構成されていることがわかる。

注目されるのは、冷泉帝が東宮時代、下命により献上された「源重之百首」の次の二首である。

夏草のしげきをわけし君なれど今は心にあきぞ来にける (重之集・夏、二五八)

秋風は吹きぬと音に聞きてしをさかりに見ゆる常夏の花 (重之集・夏、二五九)

一首目は、「今は……あきぞ来にける」と詠み、二首目は「秋風は吹きぬと……聞きてし」と、すでに秋が到来しているのにまだ「常夏」が咲いていると詠む。本来なら秋の歌であるが、この二首は夏部に置かれている。立秋とい

う節氣にこだわらず、「秋」と「飽き」の掛詞や「常夏」の「夏」という言葉の機知を主眼として詠まれているのである。

その娘である重之女による百首は、父である重之に倣ったもので、成立ははっきりとはしないものの、「和泉式部百首」に先行すると考えられる。

秋部の冒頭は次の通り。

今日までは夏とか聞きしうちつけに告げ告げにこそ風も聞こゆれ(重之女集・秋、三五)

「今日までは夏だと聞いていたのに」と、立秋前日の歌が、秋の部立てに置かれたのは、先に挙げた父、重之が秋の歌を夏部に入れたのと逆の配列になる。立秋という節氣でなく、七月を秋のはじめとする曆を基準とした配置ということであろうか。

一方秋の末尾は、

もみぢ見て(新編国歌大観底本『はて』とあるのを校訂)秋はくらしつ神無月いまは時雨になぐさまぬかな(重之女集・秋、五二)

と、今度は神無月を詠む歌が冬でなく秋の末尾に置かれる。神無月になったけれど、まだ立冬でなく秋の節だから秋の部に置いたのであるうか。曆月より節氣を配列の基準としたとすると、立秋が七月、立冬が十月の年で百首成立時期に該当するのは、永観二(九八四)年である。ただし、最初に挙げた『古今集』の秋の末尾にも見られたように、曆月基準と節氣基準が混じった構成と考えると、成立年代を特定するのは難しくなる。

実は、重之の息子の詠作『重之子僧集』に、

冬のはじめに

もみぢ見て秋はくらしつ神無月いまは時雨の空をながめむ（重之子僧集、三二）

という歌があり、こちらでは冬歌として詠まれているのである。「重之女百首」の歌を子の僧が真似て冬の歌として詠んだか、重之女が子の僧の歌を参考にして、さらにその年の曆に当てはめて秋部に置いたか定かではないが、重之の子供たちの、四季の部立に歌を配置する基準があいまいであることは留意されよう。

先に挙げた『大式高遠集』の月次屏風でも、

川風の涼しくもあるか夏ごろも我が身の上に秋や立つらむ（高遠集・六月、三四六）

と、立秋が本来の曆の秋の七月でなく、夏の六月に配されるのも、節氣と曆のずれについて、曆を優先する配置である。

さて、初期百首の系統に位置づけられる『賀茂保憲女集』²³は、「重之女百首」や「和泉式部百首」に先んじて成立した集である。ただし、流布本と異本とでは、配列に異同が認められ、構成意識を探るのはいささか困難である。例えば、冬の冒頭歌は、

わたつみに風波たかし月も日も走り舟して冬の来ぬれば（賀茂保憲女集Ⅰ、一〇七）

と冬の到来を詠むが、この歌が異本では秋の末尾に、

わたつうみに風波たかし月も日も走り舟てふ冬は来ぬらし（賀茂保憲女集Ⅱ、一〇二）

とある。まずは本文の乱れを疑うべきであろうが、同じ歌が部立を違えて配されるのは、注目されよう。

保憲女の父、保憲は曆博士、天文博士を歴任している。久保木寿子「賀茂保憲女集試論―初期百首と曆的觀念」（便宜的にⅠとする）²⁴、「賀茂保憲女集」四季序の位相―同時代仮名散文との接点から見る―（便宜的にⅡとする）²⁵は、その出自に注目し、曆意識を詳細に論じた。

久保木Ⅰは、保憲の『曆林』(天徳末ごろまでに成立、のちに散逸)が『曆林問答』に継承され、『白氏文集』の根幹「生生の理」と「易」の発想と同一であるとし、集の曆意識や白氏からの影響を指摘する(次に掲げる例は論文に指摘される例の一部)。

ちはやぶる神代より、人をば賢きものにしけるぞ。空を飛ぶ鳥といへども、水に遊ぶ魚といへども、針を設け、糸を上げて、その眼を閉ぢて、深き海といへど、木を窪め、楫を設けて、自ら渡りぬ。(保憲女集、序文)

「作結繩而為罔罟、以佃以漁…剥木為舟 剡木為楫 舟楫之利 以濟不通」(周易 繫辭下伝)

はかない鳥といへど、生まるるよりかひあるは、巢立つこと久しからず、はかない虫といへど、時につけて声をとなへ身をかへぬなし。(保憲女集、序文)

「前日巢中卵 化作雛飛去 昨日穴中虫 蛻為蟬上樹」(白氏文集十「村居臥病」)

人の世にうきにも春は通ふらし上の水草も色かはりけり(保憲女集、一一)

「泥暖草芽生」(白氏文集六十二「南池早春有懷」)、「木居少陽之位、東方主春、以温度柔為体、曲直之性。

含陰氣、内空虚、外有花葉、如人之威儀容貌」(曆林↓曆林問答 釈五行) など

萎るらん草木にたぐふ魂を心を風や吹き散らしつる(保憲女集、九二)

「草木日夜衰…我心亦如之」(白氏文集九「秋懷」)、「霜降九月中配干戊…此時物衰滅」(釈二四氣七二候)

青柳の糸にや魚は掛かるらん下ろせる影の網に似たれば(保憲女集、一一)

山川の魚を氷の閉ぢたるは風こそ網と吹き結びけれ(保憲女集、一二五)

「至正月陽氣、魚游於水上、近於氷、故云魚上氷」(問答 釈二四氣七二候)

女集に「網」が頻出するのは「離」の卦、網の目の中に物が入っているかたちを示すことから。↑久保木Ⅱ

春雨の種まくがごとわたつみにふればや石に海松の生ふらん (保憲女集、三三二)

「穀雨三月中配于辰」(釈二四氣七二候)

冬を経て照射に生ふる麦の秋は夜寒なりけり蟬の羽衣

五月蟬の声、麦の秋を送る (左注) (保憲女集、六一)

「孟夏之月……麦秋至」「仲夏之月……蟬始鳴」(礼記 月令)

ほのめきし光ばかりに秋の田の見守侘しき頃の風かな (保憲女集、七八)

「秋分八月中配於酉、雷乃收声」(釈二四氣七二候)

また、久保木Ⅱは、序文の「苔の衣あをやかなるに、黒木の橋渡し、白妙の鷺降り居て、のどかなるに、茜さす緋の色衣、深きも浅きも着たる人参り集まりて」とあるのが、五行の黄青黒白赤を意識するものと指摘し、『土佐日記』の影響もあわせて指摘する。また、「憂きことはみな忘れ草繁れり。うれしきことは尽きせぬ葦原に、鶴降り居、としを積める船、千々の帆を下す泊り、かひある海に、騒がしき波なく、(天)空に暮れたる雲なく、霞たなびきわたり、(地)木草も心を唱え、鳥虫も声々さへづれば、(人)人も慶びをなし」と、『枕草子』の「(天)正月一日は、まいて空の景色もうらうらと珍しう、霞みこめたるに、(人)世にありとある人は皆、姿、かたち、心異につくるひ、君をも我をも祝ひなどしたるさま、異にをかし。(地)七日、雪間の若菜摘み、青やかにて、例はさしもさるもの目近からぬ所にもて騒ぎたるこそ、をかしけれ」が周易の「有天道焉、有人道焉、有地道焉」に拠ることを指摘する。たしかに、集には曆意識が強く反映している。しかし、一方で二十四節気はさほど影響を与えていないように思われる。節気の順番と女集の歌の配列にはずれがあるからである。

先に挙げた二二、一二五番に詠まれる「魚氷に上る」は、二十四節気では春であるが、一二五番は冬。「重之百首」

でも「近江なるやすの入り江にさす網の水を魚と今朝ぞ見えける」と冬部に見える。六一番「麦秋」は、「月令」では五月でなく四月。久保木Ⅱも指摘するように「月令」からでなく、李嘉祐の「千峯鳥路含梅雨 五月蟬聲送麦」（和漢朗詠集・蟬、一九三）や「送るといふ蟬の初声聞くよりぞ今かと萩の秋を知りぬる」（道綱母集、四七）の影響が認められよう。七八番「雷」は、二十四節気では「白露↓秋分（雷すなわち声をおさむ）」の順になるが、女集では「露」の歌に挟まれて配される。異本も同じ。

すなわち、暦の家に生まれた保憲女の歌には暦意識が強いものの、二十四節気を歌の配列基準にしたとはいえないことがわかる。

五 暦と節気

暦そのものを和歌に詠む例は次のように見出せる。

十二月廿日、暦のはてぬるを人々よむに

まきよする暦をみれば春日野の若菜つむべきほども来にけり（安法法師集、三四）

暦得させたりける人の、心かはりにければ、師走のつごもりに返しやるに、人にかはりて

忘らるる程もしらでや過ぐさましこれに月日のさす（異本「かず」なかりせば（赤染衛門集、三九六）
 これらが師走の暦を詠むように、暦は年末が近くなる十一月に頒布されたようである。また、

暦に初雪降ると書きたる日、目に近き日野岳といふ山の雪いと深う見やらるれば

ここにかく日野のすぎむらうづむ雪をしほの松に今日やまがへる（紫式部集、二五）

かへし

をしほ山まつのは葉に今日やさは峰のうすゆき花と見ゆらむ (二二六)

について、『紫式部集全評釈』や藤本勝義「紫式部の見た曆―長徳二年具注曆をめぐって―」⁽²⁷⁾に、二十四節氣の「小雪」を「初雪降る」と注記したものであると指摘されている。

右両判為勝

師俊朝臣

露結ぶしも夜の数をかさぬればたへでや菊のうつろひぬらん

次歌は、心詞いとをかし、但、是もおぼつかなし、露結ぶと初に置かれたるはいかに、もし露結びて霜となるといへるか、それならば曆などに付きたる事なれば一夜のことなめり、次の夜よりは霜のかぎりこそ置くべけれ、此歌のころは、よごととに露のしもになるやうに聞ゆればひがごとならん、おぼつかなければも文、字づかひなど優なれば、まさりてぞみゆる(内大臣家歌合、二八 俊頼の判)

この、元永元(一一一八)年十月二日に催された内大臣家歌合の師俊歌に対する俊頼の判にある「露結びて霜となる」は、南朝の梁王朝の『千字文』にある「雲騰至雨 露結為霜」による文言である。曆にこのような歳時記が書かれていたことがわかる。

では、二十四節氣そのものどのように詩歌に詠まれてきたのであろう。例えば「春来天气有何力 細雨濛濛水雨 穀 忽望遲遲暖日中 山河物色染深緑」(新撰万葉集、一〇)のように、春になり、天に春の気が起こつて雨を降らせ、次第に暖かくなつて山河の色を緑に染める「立春・雨水・清明・穀雨」という節氣を意識した表現が認められる。

和歌では、次のように詠まれている。

霜降―山かげにあれたる霜のわれなれや思ふ心のとけでのみふる(古今六帖・霜、六七二)など。

寒露―秋の夜は露こそことに寒からし草むらごとくに虫のわぶれば（古今・秋上、一九九 詠み人知らず）など。↓た

だし、「寒露」は十月上旬。

冬至― 一年冬至夜偏長

ひととせにふゆくことは今ぞしるふしおきすればあかしがたさに（千里集、五九）

小雪―（前出）暦に初雪降ると書きたる日、目に近き日野岳といふ山の雪いと深う見やらるれば

ここにかく日野のすぎむらうつむ雪をしほの松に今日やまがへる（紫式部集、二五）

かへし

をしほ山まつのは葉に今日やさは峰のうすゆき花と見ゆらむ（二二八）

白露―八月朔日ころなるべし：／われにつゆあはれをかけば立ち帰りともにを消えよ憂き離れなむ（落窪物語・卷

（二）

さらに範圍を広げて「節」「節日」「節分」「彼岸」の例を見ていこう。

節日は、『令義解』諸節日条に、

凡正月一日。七日。十六日。三月三日。五月五日。七月七日。十一月大嘗日。皆為節日。

とある。『枕草子』の「節は」には、

節は、五月にしくものはなし

とあり、また、三月三日の節について、

三月三日はうらうらとのどかに照りたる。桃の花の今咲きはじむる、柳などをかきこそさらなれ。それもまた
まゆにこもりたるはをかし。（正月一日は）

と記される。三月三日は上巳の節句と言われる。二十四節氣七十二候の啓蟄（二月節）の次候に「桃始笑」とあるように、桃の節句である。また、冬至から百五日目の寒食節と、続く清明節に行われる上巳の日に、柳と桃を飾る中国の風習が、『万葉集』の伴池王の詩序などに見られることはすでに指摘がある。また、清少納言の仕えた定子の兄、伊周の漢詩にも、

三日花朝和暖辰 紅桃間柳発粧新：（本朝麗藻・巻頭詩）

があり、節が節目の日として認識されていた。

節分は特に年の変わる立春、方違えをする節日として、彼岸は仏に精進する日として大事な日であったことがわかる。節分は特に年の変わる立春、方違えをする節日として、彼岸は仏に精進する日として大事な日であったことがわかる。

『源氏物語』宿木巻に、

夏にならば三条宮ふたがる方になりぬべしと定めて、四月の朔日ごろ、節分とかいふことまだしき前に渡したてまつり給ふ。

とあるのは、夏になると薫の住む三条の宮が方ふたがりになるので、四月であつてもまだ立夏になる前、春の節のうちには宮中から女二宮をお渡ししようという場面である。

同じく、東屋巻に、

九月は明日こそ節分と聞きしかと言ひなぐさむ。今日は十三日なりけり。

とあるのは、薫が強引に浮舟を連れ出す場面である。解釈が分かれるが、忌月の九月も十三日にはあるが、節氣のうえで九月の節、つまり寒露（別解では霜降）には入っていないので大丈夫だと尼君が慰める。

『栄花物語』みねの月巻には、

秋の節分にいと疾く入りぬべければとて、七月三日、内裏に帰らせ給ふ。

とあり、嬉子の見舞に土御門邸を訪れた東宮が、七月ではあるが、まだ夏の内で、秋の節分になると方ふたがりになるといので、節分前に急いで宮中に戻ると言う場面がある。

『大鏡』三条院卷には、

医者どもの、大小寒の水を御頭に沃させたまへと申しければ、こおりふたがりたる水を多くかけさせたまける(マ)マに、いとみじくふるひわななかせたまて御色もたがひおはしましたりけるなむ、いとあはれに悲しく人々見まゐらせけるとぞうけたまはりし。

と、寒の水を頭に注いで病からの回復を祈る場面がある。

二十四節気ではないが、日照時間による「彼岸」も、『蜻蛉日記』中巻、

二月も十余日になりぬ。……彼岸に入りぬれば、なほあるよりは精進せむとて、

をはじめ、『成尋阿闍梨母集』九五番にも見出せる。このように、季節の節目は日常生活と深く結びついていたと思われるが、和歌を撰集するうえで、どうして配列上の節目たり得なかつたのだろうか。

六 尽日の「今日」を詠む歌

『古今六帖』の「春のはて」題には次の歌が並ぶ。

行く春のたそかれ時になりぬれば鶯の音もくれぬべらなり(古今六帖、六一 貫之)

つれづれと花を見つつぞくらしつる今日をし春の限りと思へば(古今六帖、六一 躬恒)

声たててなげや鶯一とせに二たびとだに來べき春かは (古今六帖、六三 藤原興風)

花もみなちりぬる宿はゆく春の故郷とこそなりぬべらなれ (古今六帖、六四 素性)

花のもとたつことうくもなりぬるか春は今日をし限りとおもへば (古今六帖、六五 貫之)

散る花のもとにきてしぞ暮れはつる春の惜しさもまさるべらなれ (古今六帖、六六)

花見つつをしむかひなく今日くれてほかの春とや明日はなりなん (古今六帖、六七)

六七番「ほかの春」について、田中新一は節気意識を指摘^⑧。明日は四月に入るが、まだ立夏にならないから、「ほかの春」が明日以降立夏まで続くことを詠むと解す。

注目されるのは、「今日をし春の限りと思へば」(六二)、「春は今日をし限りとおもへば」(六五)のように、「今日」という表現が強調されることである。同様の詠みぶりは、他にも見出せる。

やよひのつごもり

ゆくさきになりもやするとたのみしを春の限りは今日にぞありける (後撰・春下、一四三 貫之)

三月晦日

世にあらばまたもあひなん春なれど命を捨てて今日をしむらむ (安法法師集、八五)

延喜七年五月晦夜うちのおほせごとによりてたてまつるうた二首

さみだれは今宵ばかりかほととぎす声もや今日のかぎりなるらむ (躬恒集、二五三)

『古今六帖』の躬恒の歌は、『私家集大成』の『躬恒集Ⅱ』では「三月尽を」という詞書を持つ (他本「屏風」)。

『後撰集』の貫之歌もやはり「やよひのつごもり」の詞書で「春の限りは今日にぞありける」と、尽日の今日を惜しむ。

すなわち、『古今六帖』の「春のはて」に詠まれる「今日」は、立夏の前日の「今日」でなく、三月尽日の「今日」であるのだ。小島憲之「四季語を通して―「尽日」の誕生^①」は、尽日を惜しむ表現が中国の詩文、特に『白氏文集』に影響を受けた菅原道真や大江千里らにより広がりを見せたことを指摘した。その意識が和歌の世界に持ち込まれたのではないだろうか。

以上、見てきたように、生活の中で、暦の「節分」が「方違へ」をするなど慎むべき節目の日として尊重されていたことは、『枕草子』『源氏物語』『栄花物語』から明らかである。和歌においては、季節の区切り、「節」としての「節気」は意識されたものの、二十四節気そのものを詠む歌は多くはなかった。現実的な日常生活が暦を基準として営まれた一方、『礼記』『月令』や二十四節気七十二候は、むしろ知的観念的な季節の移り変わり、気（天気・陽気・陰気）の流れを示すものと認識されていたためではないか。『古今六帖』の「春のはて」題では「今日」という語が、尽日における「今日」を指すと考えられる。今日を限り、という最後の日を惜しむ気持ちだが、漢詩の発想から和歌世界に広がり、日数に幅のある節気より暦月意識のほうが優先されたのではないだろうか。

暦の頒布やそこに注される「凶会日」などの禁忌の尊重、日記文学の成立、月次屏風の流行の一方で、古今以降、節気は和歌の表現材料として定着しなかったものと思われるのである。用例の見落としも多くあろう。ご叱正賜れば幸いである。

〔注〕

- (1) 窪田空穂『古今和歌集評釈』『窪田空穂全集二十』(角川書店 一九六五年)、松田武夫『古今和歌集の構造に関する研究』(風間書房 一九六五年) など。
- (2) 成立未詳。詠歌年次の確認できる最も新しい歌は、貞元元(九七六)年作の「琴の音に峰の松風かよふらしいづれの緒よりしらべそめけむ」(斎宮女御)であるので、それ以降かとされる。
- (3) 笠間書院 一九七二年
- (4) 『平安時代文学と白氏文集 増補版 句題和歌と千載佳句研究篇』(培風館 一九五五年)を参照した。
- (5) 明治書院 一九五九年
- (6) 岩波書店 一九八九年
- (7) 小学館 一九九四年
- (8) 風間書房 一九九〇年
- (9) 田中幹子『古今集における季の到来と辞去について―三月尽意識の展開』(中古文学 一九九七年三月)、のち『和漢朗詠集』とその受容』(和泉書院 二〇〇六年所収)には、『立春解凍』が『礼記』「月令」の節氣意識に基づくのではなく、白居易の詩文から撰取した季の捉え方であることが論じられている。
- (10) 風間書房 一九六八年
- (11) (4)に同じ。
- (12) 例えば、小島憲之・新井栄蔵『新日本古典文学大系 古今和歌集』(岩波書店 一九八九年)は、一首前の詞書「弥生の晦日の日」を「陰曆春三月の下旬又は末日」と注を付け、当該歌の下の句を「今年のうちはこの春も幾日もあるまいと思うから」と解す。
- (13) (4)に同じ。
- (14) 和歌文学研究 一九七九年三月
- (15) 大妻女子大学大学院文学研究科論集 一九九二年三月
- (16) 国語と国文学 一九九五年七月
- (17) 王朝 一九七五年六月、のち『王朝国語の表現映像』新典社 一九八二年所収
- (18) 大治元(一一二六)年から俊頼が没した同三年秋〜冬まで。
- (19) 上巻については堀河院崩御の嘉承二(一一〇七)年以前に自撰奉獻されたもの。

- (20) 和歌文学研究 二〇一三年六月
- (21) 冷泉院の東宮時代に帯刀長を勤めたのは、康保四(九六七)年以前。それまでに成立した。
- (22) 武田早苗『重之女百首成立試論―編纂意識を中心に―』(和歌文学研究 二〇〇八年十二月)、渦巻恵・武田早苗『源重之女
集 重之子僧集新注』解説(青簡舎 二〇一五年)において指摘されている。
- (23) 歌番号は(22)の『源重之女集 重之子僧集新注』による。『新編国歌大観』では五八番。
- (24) 流布本と異本については、渦巻恵『賀茂保憲女集新注』(青簡舎 二〇一五年)解説など。
- (25) 久保木Ⅰ 文学・語学 一九九五年八月
- (26) 久保木Ⅱ 白梅学園短期大学紀要 二〇〇八年三月
- (27) 南波浩『紫式部集全評釈』(笠間書院 一九八三年)、『紫式部の見た暦―長徳二年具注暦をめぐって―』(青山学院女子短
大紀要 一九九六年十二月)
- (28) 『新編日本古典文学全集 落窪物語』(小学館 二〇〇〇年)頭注に「二十四節気の一つである「白露」が秋分前の十五日、
すなわち八月に当たるので、この場面の初めに八月朔日とあることから、露の歌を詠んだ」とある。
- (29) 工藤重矩『平安朝和歌漢詩文新考 継承と批判』(風間書房 二〇〇〇年、初出『講座平安文学論究』九輯 一九九三年)
- (30) (8)に同じ。
- (31) 国語国文 一九五〇年十月。また太田郁子『和漢朗詠集』の「三月尽」「九月尽」(言語と文芸 一九八一年三月)などに
も論じられている。
- 〔付記〕引用した和歌の本文は『新編国歌大観』(古典ライブラリー)により、一部表記を改めた。『万葉集』の歌番号は旧番
号を用いた。なお、本稿は、二〇一七年度全国大学国語国文学会夏季大会(於早稲田大学)における口頭発表に基づく。ご教
示くださった諸先生方に感謝申し上げる。

Changes of the editing style of Waka Anthologies in the Heian Era: The treatments of season words, Sekki and Rekigetsu

Megumi Uzumaki

Waka (literally, “Japanese poem”), a 31-syllable poem consisting of five lines in the pattern 5-7-5-7-7, has long history dating back to the 7th century. This article focuses on waka in the Heian era (794-1185), analyzing how they used *Sekki*, words dividing one year into 24 seasons, and *Rekigetsu*, months in the lunar calendar.

In the lunar calendar, *Risshun*, one of the *Sekki*, the first day of spring, sometimes comes before the end of the year. They call it “Nennai Risshun,” Risshun before the end of the year. Previous studies have shown that in *Eikyu Hyaku-shu*, completed in 1116, the editors of Waka anthologies began to give priority to *Rekigetsu* over *Sekki*.

In this article I will explain that the relative priority of *Rekigetsu* and *Sekki* had already changed by the middle of the Heian era, earlier than the work of *Eikyu Hyaku-shu*.

First, I examined *Kokin-waka-shu*, one of the most esteemed Waka anthologies at the beginning of the Heian era, compiled in about AD 905. The editors of *Kokin-waka-shu* categorized Waka of “Nennai Risshun,” at the beginning of the spring part, which means they prioritized *Sekki* over *Rekigetsu*.

This custom, however, had changed by the middle of the Heian era. Both in *Minamoto Shitago Hyakushu*, completed by Minamoto Shitago and in *Dai-ni Takato-shu*, completed by Fujiwarano Takato at the end of the 10th century, Waka of “Nennai Risshun” were placed in the part of winter. That is to say, more than one century before the completion of *Eikyu Hyaku-shu*, the editors of Waka anthologies began to prioritize *Rekigetsu* over *Sekki*.